

Title	Point Counter Point について
Author(s)	三浦, 良邦
Citation	Osaka Literary Review. 34 P.38-P.48
Issue Date	1995-12-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25404
DOI	10.18910/25404
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

Point Counter Point について

三浦 良邦

I

1928年に発表された Aldous Huxley の *Point Counter Point* は、それまでの前三作を包括し、総合しようとする「野心的な」¹⁾ 大作である。*Crome Yellow* (1921)、*Antic Hay* (1923)、*Those Barren Leaves* (1925) において使用されたハウス・パーティ形式での会話、あるいは、登場人物に対する Huxley の風刺や揶揄は *Point Counter Point* でも継続しているが、Huxley はこれ以外に新しい実験を試みている。Huxley は、小説の構成に音楽の構成を応用して「小説の音楽化」²⁾ という構想を打ち立て、また、内容としては「思想小説」(p. 409) という概念を導入して、様々な20人近い登場人物の錯綜した人間関係を、夜会・レストラン・クラブ・家庭での会話や議論、映画のフラッシュバックに似た技法、手記、手紙等を用いて描写し、*Point Counter Point* を壮大な人生のシンフォニーに仕立てあげている。

小説のテーマは、小説の冒頭に記された Fulke Greville の「情熱と理性は自己分裂の源にあらずや」に述べられているように、人間は精神面と肉体面に自己分裂を起こしているということである。³⁾ これに対する counter テーマは、人間の精神面と肉体面の調和と平衡のとれた生き方であり、この思想が小説全体の規範の思想となっている。後者の思想の具現者は Mark Rampion であり、前者の思想の具現者は Rampion 夫妻を除いたすべての登場人物であり、その代表は Philip Quarles である。本論では、Philip と Rampion を比較することによって、人間の精神面と肉体面との対立・葛藤と融合の問題を考察してみたい。これについては、すでに議論が尽くされて

いるかもしれないが、私なりの見解をまとめてみたい。また、その過程で彼らの妻を通して Huxley の女性観も考えてみたい。

II

Philip Quarles は、知性が極度に発達し、物事を観察・分析し、理論を組み立てることが得意である。この Philip の知性は、20世紀前半の文明社会の様々な事象を分析・解釈し、彼が小説家として成功する原動力となった。しかし、彼は知的である反面、情緒面、特に人間的な感情が不足している。この感情の欠如のため、彼は人間関係がわずらわしく、特に個対個の人間関係が苦手である。そのため、彼は他との関係を妻の Elinor に依存しているが、自分と妻との関係は誰も仲介者がいなく、自分が妻と向き合うほかはない。しかし、Philip は Elinor とうまくいかない。Elinor は Philip に〈暖かみのある人間的愛情〉を求めるが、Philip は Elinor の喜びや悲しみに共感することができなく、二人の気持ちは絶えず行き違うのである。例えば、巨大な満月を見て、Elinor はすぐさま楽しかった新婚時代を思い出し、「あの頃の晩を覚えていらっしゃる」(p. 99) と夫に同意を求める。それに反して、他の事に思いを巡らしていた Philip は、妻に言われて楽しかった新婚時代を思い出すが、考えを中断されたことを不快に思い、そっけない返事をする。そのことで、Elinor は夫はもう自分を愛していないと感情的になり、彼を非難する。それに対して、Philip は論理的に反駁する。もう一つの例は、彼らの乗った車が犬を轢いた時の二人の反応である。Elinor は、率直に犬がかわいそうと言うが、Philip は犬が牝犬を追いかけていて轢かれた出来事から、道徳の問題とかシシリーの出産統計とかを話し出す。この二つの例が示すように、Philip は〈知性の殻〉に閉じこもり、最も身近な人間であり、信頼すべき妻とさえ意志を疎通させることができないのである。彼は知性と感情に自己分裂を起こし、行動不能に陥っているの

である。

しかしながら、*Point Counter Point* では、Philip 一人だけが自己分裂に苦悩しているのではなく、Rampion 夫妻を除いたすべての登場人物が何らかの自己分裂を起こしている。人間には、精神と肉体、また知性、理性、直観、本能、感情等が存在するが、登場人物はいずれもどれかに偏った生き方をしており、不十分な生を生きている。比較的わかりやすいのは、肉体や本能を代表する John Bidlake や Lucy Tantamount、あるいは学者で知の代表である Lord Edward Tantamount であるが、この他にも興味深い人物が登場する。実生活に絶望し、神の存在を求めて考えられる限りの反社会的な罪悪を重ね、最後には殺人まで犯す Maurice Spandrell、自身は精神的だと信じているが、その実軽薄で人生享楽型の Denis Burlap、言動が一致しない共産主義者の Frank Illige、ファシズム団体のイギリス自由人連盟の首領の Everard Webley 等である。また、Huxley の辛辣な風刺の俎板にのせられ、その無能さの描写が最も読者の共感を得る人物は、Sidney Quarles である。

これらの人物に混じって、Huxley の他の作品との関連から重要なのは Walter Bidlake である。Walter は *Those Barren Leaves* の若き日の Francis Chelifer の女性に対する理想と現実の葛藤を受け継ぎ、また後期の神秘主義的作品、例えば *Island* (1962) の Will Farnaby へと発展していく人物である。Walter は妊娠している気の毒な内妻の Marjorie Carling を大事にしなければと考える反面、彼女の精神性に飽き足らず、理性では反発しながら、自由奔放で娼婦型の Lucy に邪険に扱われながら、彼女に引き寄せられる。つまり、Will と同様、Walter は〈なすべきでないこと〉⁴⁾をしてしまう。その結果、Walter は、常に心の奥底では、罪悪感に苦しみ、良心の呵責に悩むことになる。Walter は、Lucy との愛欲を「あの女とのことは狂気のようなものだ。したくはないんだ。どうにもならないんだ」(p. 208) と Marjorie に弁解しているが、彼には理性的、良心的な

面と情念的、本能的な面とが同居しており、彼は絶えずその二つの果てしない相剋に引き裂かれているのであり、その二面はどこまでいっても平行線で交差しないのである。

III

Point Counter Point では、Rampion 夫妻以外のすべての登場人物が自己分裂を起こし、人生に苦悩しているが、Philip と彼以外の人物との間には重要な相違点の一つ存在する。つまり、Philip 以外の人物は苦悩しているだけで、苦悩の原因を探求したり、自己を変革する必要を認識していないのに対して、Philip だけが登場人物中唯一自己変革の必要性を自覚し、自己再生への意欲を示すということである。この点において、Philip は、登場人物の精神面と肉体面との融合への潜在的な願望を代表して、自己変革という命題に挑戦する人物と考えることも可能であるが、Philip にはもう一つの性格がある。Philip は前三作の主人公、特に *Crome Yellow* の Denis Stone、*Antic Hay* の Theodore Gumbriel Junior の延長線上に位置しており、自意識過剰で優柔不断な知的青年の行動不能という問題を継続・総合しているのである。

Philip の自己変革は、まず自身の生活への反省から始まる。Philip は自身の生活に満足しているのではなく、彼自身の生き方に疑問を抱き、自身の生活の欠点を自覚している。「頭の才だけでない心の才能。分析的に理解する才だけでない、感情の、共感の、直観の才能。それが自分にはない。心、心」(p. 267)。この自己を客観視する Philip の優れた知性は、更に、彼の知的生活の欠陥を見事に分析している。

I regarded the Search for Truth as the highest of human tasks and the Searchers as the noblest of men. But in the last year or so I have begun to see that this famous Search for Truth is just an amusement, a distraction like any other, a rather refined

and elaborate substitute for genuine living . . . I also perceived that the pursuit of Truth is just a polite name for the intellectual's favourite pastime of substituting simple and therefore false abstractions for the living complexities of reality. But seeking Truth is much easier than learning the art of integral living . . . (pp. 443-4)

Philip は、知的活動の分析を通して、重要なのは「真理探求」ではなく、現実の複雑さの中で人間として生きることである、と悟る。そして、「私にとっての問題は、傍観者的な知的懐疑主義を調和のとれた全面的な生き方にかえてゆくことだ」(p. 440) という Philip の決意になる。

しかし、Philip のこの決意は実行に移されない。単に思考上の決意で終る。Philip は「自分の心理的欠陥に気づき、理論的にそれを改めようと欲する。が生涯の習慣を破ることはむづかしい」(p. 474) のである。Philip は理論的には<人間関係に無関心で冷淡である>という自己の欠点を認識し、その矯正の必要性を自覚しているが、実際の日常生活では行動できないのである。この段階で、知識と行動のギャップをいかにして埋めるかが Philip の課題となる。Philip は、日常生活において知性と感情に自己分裂を起こしていたが、その二つを調和する実践段階において、理論と実践、知識と行動の間で自己分裂を起こし苦悩することになる。つまり、Philip がどれだけ理論を構築しようと、それは無意味に近いのであり、Philip が直面している問題は、どう生きるべきかではなく、いかに実践すべきかであり、実践できない人間がいくら思考を重ねても無駄である。

結局、Philip は理論を弄び実行力に欠ける知識人の様態を暴露することになるが、それを象徴的に表現しているのが子供の Phil の死である。Philip が Rampion、Burlap、Spandrell と共に、人間や人生に関する議論を重ね、また自身の生活に対する分析・内省を重ねている間に、Elinor は Webley に傾斜し、Phil は脳膜炎で刻一刻と死に近づいている。これは「抽象がいかに人生を破壊するか」(p. 559) の例であり、Phil の死は実人

生に対する知性の無力を象徴していると言うことができる。抽象的な議論や思考は、実際の生活の前には無に等しく、何の役にもたないものである、という Huxley の痛烈な皮肉であろう。

Philip は彼の生活様式の結果、Phil の死という取り返しのつかない代価を払うのであるが、Phil の死によっても Philip の生活様式は変化しない。奇跡は起きないのである。Phil の死後、傷心の Philip 夫妻は外国へ旅立つが、二人は恐らく空虚な索漠とした夫婦生活が予測される。

結局、Philip の知性と感情の調和論は、Philip の現況の分析でしかない。つまり、Philip が知性と感情を統合して調和した生活を構築しようとする時、Philip の知性と感情の間には越えることのできない「大きな深淵」(p. 442) が横たわっており、二つの調和を実践しようとするほど、Philip はかえって深い自己分裂を意識することになる。言い換えれば、精神面と肉体面の調和のとれた全般的な生き方は、Philip にとって憧憬にしか過ぎなく、〈不可能な憧れ〉である。この生き方は、一つの目標とはなるが、到達は不可能である。知性が発達した Philip にとって、本能とか感情の生活が重要である、という生き方の指針を確認するだけである。

IV

Philip の対極に位置し、現実の複雑な人生を生きている人間として、Philip の模範となるのが Mark Rampion である。Rampion は *Point Counter Point* において、主観的、客観的に、精神面と肉体面の調和と平衡のとれた生活をしており、彼の思想、生き方がこの小説全体の中心的な規範となっている。Rampion の思想は、次のようなものである。

Nobody's asking you to be anything but a man. A man, mind you. Not an angel or a devil. A man's a creature on a tight-rope, walking delicately equilibrated, with mind and consciousness and spirit at one end of his balancing pole and body and instinct and

all that's unconscious and earthy and mysterious at the other. Balanced. Which is damnably difficult. And the only absolute he can ever really know is the absolute of perfect balance. (p. 560)

Rampion によれば、人間は片方に精神、知性、理性、他方に肉体、直観、本能、感情を備えており、人間の理想的な生き方はこの二面が調和された生き方である。過去においては、ギリシャ人やエトルリア人は「調和のある完全な生活」(p. 144) をしており、また *The Marriage of Heaven and Hell* (1790) を書いた William Blake もそうであった。しかし、この二面は敵対し、分裂する傾向にあり、均衡をとるのが難しい。特に20世紀においては、この二面の平衡は「とても難しく」なっている。キリスト教が人間の精神を強調し、科学が知力に重点をおいたからであり、またその結果、肉体的なものが軽視されてきたからである。つまり、科学、産業の進歩による20世紀の機械的物質文明は、「理知の偏重」(p. 417) と「人間性のあらゆる生命的根源的なもののいよいよ萎縮」(p. 417) を招いたのであり、知性と感情、理性と本能、精神と肉体の和解・融合は不可能に近くなっているのである。これが、*Point Counter Point* において、Rampion が主張していることであるが、事実、*Point Counter Point* の登場人物はほとんどバランスを崩し、張り綱から落下しているのである。

Lucy は「何事も代償なしでは手に入らない」(p. 283) と述べ、Spandrell は「現実には起こることはすべて本質的にその人にふさわしいことなんだ」(p. 289) と語っているが、*Point Counter Point* のほとんどの人物が自身の生活様式に対して代価を支払い、悲惨な結果に終わっている。Quarles 夫妻は子供が死亡し、Walter は Lucy に去られ失意の日々を過ごしており、Spandrell は自殺同然の死を迎え、John は死の考えに悩み、Sidney は妊娠した秘書にどなりこまれ病気になる、Webley は殺害されるのである。偽善的精神主義者の Burlap だけが喜々としてバラ色の人生を過ごしている。また、何事も起こらないのは Rampion 夫妻だけである。

人間は悲惨な生を送る運命にあるのだろうか。

V

結局、*Point Counter Point* では、人間の目標は設定されているが、そこに至る方法は述べられていないのではないか。目標は正しいが、そこに至る方法が提示されていないと思われる。川のこちら側にいる人間に対岸のすばらしさをいかに力説しても、その人が泳ぐことができなければ無駄である。その人に何らかの方法で川を渡ることを教える必要があるのではないか。*Point Counter Point* では、登場人物の自己分裂は十二分に描写されているが、その自己分裂から脱出する方法は考えられていない。Huxley は人間の現状分析は行っているが、それにどのように対処するかは述べていないのであり、処方箋は出せないでいるのである。

また、Peter Bowering が言っている「救いをもたらす人物」(the redemptive character)⁵⁾ は、*Point Counter Point* には不在である。救いをもたらす人物とは、Huxley の後期の神秘主義的作品である *Eyeless in Gaza* (1936) の Dr. Miller や *Time Must Have a Stop* (1944) の Bruno Rontini のように、目標への道を導く師とも言うべき人物を指すが、そのような人物はこの小説には登場しない。Rampion も Elinor も、悲惨な人生を歩んでいる Philip にそこからの脱出の道を示す人物ではない。

Philip は、Rampion が精神面、肉体面で過不足のない全面的な生き方をしている、と考え、絶えず Rampion を見倣おうと努力しているが、実は Rampion は *Point Counter Point* では、単に自説を声高にしゃべり、他の人物の上に超然と位置して、彼らの生き方を診断しているだけである。彼の実生活の描写はほとんどなく、まして彼の生き方の描写はない。Rampion という人物は退屈だという批評が定説になっているのである。

Elinor は確かに Philip の感情の枯渇を直そうと努力している。Philip

を他の女性と恋愛させることによって、彼に感情を取り戻させようと試みたり、あるいは、自身の Webley に対する浮気心を Philip に話すことによって、彼の嫉妬を引き出そうとしたりしている。しかし、そのような対症療法によっても、Philip の感情は蘇生しない。Elinor のこのような努力は、かえって、Philip の感情の枯渇を強調しているだけのように思われる。

さて、このように考えを進めてくると、*Point Counter Point* には全然希望がないように思われるが、Rampion の妻の Mary の存在が人間の生き方に一つの希望を与えるように思われる。Rampion 夫妻は、Rampion の精神面と肉体面の調和と平衡論に焦点が当てられており、読者の関心はその平衡論に行きがちであるが、Rampion 夫妻の意味するものはもう一つある。それは男女の調和と平衡である。Rampion 夫妻は、個の内部での調和と平衡だけではなく、夫婦間の調和と平衡の必要性を示していると考えられる。

すでに述べたように、*Point Counter Point* では、Rampion 夫妻の現在の生活はほとんど語られていないが、その代わりに彼らの若い頃の話が結婚を中心に語られている。その物語の中で、Mary が Rampion の人間形成に強い影響力を与えたことが述べられている。Mary は「何か大きな肉体力、非常な精力、非常な強さ、健康さ」(p. 143) を併せ持った「知性のある原始人」(p. 143) であり、自分の意見を持ち、それに従って行動する女性である。例えば、Mary は、結婚に関して、両親の反対を押し切り、世間の慣習に従わないで、自分で結婚相手を選ぶ。また、結婚後、Rampion が呆れ悲しもうと、彼女は絶対に朝寝の習慣をやめないのである。Mary は、対人関係において、安易に相手と妥協しない強い自我や意志を持った女性である。このような強固な個性を持つ Mary は、彼女の所属する貴族階級への敵意と二人の生活様式の大きな差異のため、結婚をためらっている Rampion に彼女との結婚を決意させ、二人の間の「たいへんな深淵」(p. 142) を飛び越えさせたのであり、また Rampion が、将来の進路に関して、

教師か画家兼劇作家かの二者択一に迷っている時、彼に「自分の頭だけで」(p. 150) 生きる決意をさせたのである。更に、Mary の「苦のない高笑い、旺盛な食欲、天真爛漫な色欲」(p. 157) は、Rampion に、子供の頃から母に培われてきた人間の「本能的肉体的部分」(p. 156) の否定という「清教精神」(p. 157) を克服させたのである。

勿論、Mary は、Rampion の存在感を持って「烈しく生きている」(p. 149) 態度に好感と信頼を寄せて Rampion と結婚したのであり、「彼女自身の人生も幸福もすべて結婚のおかげであり」(p. 132)、また対人関係については、彼女は Rampion の判断に「絶対の信頼」(p. 133) を置いているが、Rampion 夫妻は、どちらかと言えば、Rampion の方が生き方について Mary からより多くの事柄を学んでいる感じがする。Rampion の現在は Mary のおかげである、と言っても過言ではないと考えられる。

Mary は女性として、男性の付属物ではない、対等の立場を主張し、それ故、Rampion 夫妻は、強固な自我が衝突する時、しばしば喧嘩もするが、彼らは、夫妻のどちらが主でも従でもない、平等の関係を維持し、お互いに良い影響を与えている。Rampion 夫妻は、D・H・Lawrence 夫妻をモデルにしていると言われ、理想化しすぎの感があるが、理想的な男女関係として描かれている。

一方、*Point Counter Point* の Mary 以外の女性は、Lord Tantamount の妻の Hilda や娘の Lucy のような例外的な女性もいるが、どちらかと言えば、男性の身勝手な生き方の被害者として描かれている。Sidney の妻の Rachel は、政治にも事業にも失敗した無能で尊大な夫を巧みに操作しながら家庭を営んでいるが、自身はカトリックに逃避している。John の妻の Janet は、全然家庭に寄り付かない放蕩者の夫が、病気になり自身の所に助けを求めてくれば看病しているが、東洋仏教的な生活信条を持ち、「美術と文学の空想の世界」(p. 447) に慰めを見出だしている。また、Elinor は、Philip に感情を取り戻させようと色々努力するが報われることがなく、心

ならずも次第に Webley に傾いていく。Rampion は、自身の母を評して、彼女は自分の生活について「あきらめてはいけないんだ。反抗しなくちゃいけない」(p. 146) と述べているが、これらの女性たちは、男性優位の人生で男性に隷属することに甘んじ、自己主張が少なく、人生と戦わない。彼女たちは、受動的で人生に対して積極的ではないのである。彼女たちが強固な自我を確立していれば、彼女たちの、あるいはその夫たちの人生も違ったものになっていたかもしれない。

女性が男性と対等な立場にたつての人生に対する積極的な関与が、Philip を代表とする自己分裂に苦しむ人間の閉塞性からの脱出の可能性を示唆するのではないだろうか。

注

- 1) Grover Smith (ed.), *Letters of Aldous Huxley* (London: Chatto & Windus, 1969), p. 274.
- 2) Aldous Huxley, *Point Counter Point* (London: Chatto & Windus, 1963), p. 408. 以下、この作品からの引用はこの版に基づきページ数のみを記す。なお、引用部分の日本語訳は朱牟田夏雄『恋愛対位法』(岩波書店)から借用した。
- 3) 精神面には頭脳、知性、理性、精神が、また肉体面には直観、本能、感情、肉体が含まれる。精神面と肉体面の区分法は異論があるかもしれない。今後の課題である。
- 4) *Island* で Will は彼の浮気について妻と口論し、妻は交通事故死する。
- 5) Peter Bowering, *Aldous Huxley: a Study of the Major Novels* (London: The Athlone Press, 1968), p. 20.